



「タイ国における排水活動（国際緊急援助隊）の実施に関する座談会」その2

国土交通省総合政策局公共事業企画調整課

開催日：平成24年1月18日（水）

会場：機械振興会館会議室

参加者：

荒井 猛氏（関東地方整備局）

岩崎 哲也氏（中部地方整備局）

川端 郁雄氏（北海道開発局）

塩入 健治氏（関東地方整備局）

神宮寺 保秀氏（関東地方整備局）

新田 恭士氏（財先端建設技術センター）

宮島 実氏（北陸地方整備局）

進行：

森川 博邦（総合政策局公共事業企画調整課）

（3月号掲載の「タイ国における排水活動（国際緊急援助隊）の実施に関する座談会」その1からのつづき）

〈トラブル回避の秘訣（その2）〉

川端 今回、輪中堤の高さが低かったことから、ポンプ排水量を算出した結果、ポンプ出力を100%にしても70%にしてもそれほど排水量に差がなかったので100%では運用しませんでした。

塩入 ヘッド差が小さいため、能力的には定格以上の排水量が出ているので、そんなに目いっぱい回して負荷を掛けるよりは、余裕を持っている範囲の中でうまく回していくほうが効率的だという考えで、みんな運用していました。

新田 今回の洪水規模から考えて、国際緊急援助隊が持ち込む排水ポンプ車10台は、余裕のある台数とは言えませんでした。3班編成で各班が3台使用することとし、1台を予備車両と考えましたが、活動期間が長期になることから故障により使えるポンプが減ることが心配でした。神宮寺さんとも、長時間運転では発電機の故障に注意する必要性を考えていました。

岩崎 現場には日本製の発電機も沢山あり、そのまま使えるなどか言っていました。

新田 排水ポンプ車の派遣台数は、検証すべきポイントの一つだと思います。今後の国際支援でもこの位の規模を基本にするのか。排水ポンプ車の排水能力を耐

久性も含めて検証すべきです。かつて中越地震の際「200時間以上の連続運転は保証できません」という説明をメーカから受けました。河道閉塞箇所の越流防止に使っていたので、「1週間耐えられないかも知れない」と困惑し予備機材の確保を進めました。

今後の国際支援では、壊れたら直せないことも想定しスペア機材や予備ポンプをどのくらい持っていくべきか、よく考えておくべきだと思います。

森川 今回これだけ長時間動かしたら相当壊れてもおかしくなかったのに、ほとんど無事に帰ってきた理由はもう少しありませんか。工夫をしたことの報告の中で、私が感心していたのは、1日1回あるいは2回、水の中からポンプを上げて、ストレーナーに詰まっているものを全部取ったという話。これは最初にどなたかがこうやってくださいという指示をしてくれたのですか。

岩崎 僕は実は東日本大震災後の仙台空港の排水でも一緒のことをしていたんです。あそこでは長期戦になるということが分かっていたので、長期戦になるということはやはりポンプを大事に使わないといけないので、とにかくすぐにごみを取るようになりました。そのときはちょっとごみがたまっただけかなというふうに上げてごみ取りをしたという経験がありました。

今回は発電機等のこともあったので、とにかく1日2回はポンプ車を休ませたいと思っていました。エンジンも、発電機も1時間止めてしまえばその間に燃料の給油をしたり、ごみ取りもできるので、そんなにロスにもならないと思ったので、タイに行く前から2回は止めようとは思っていました。

現場で説明するのも、「燃料を入れるときは危ないから発電機を止めないといけない」という理由も付けました。「別に運転しっ放しでいいんじゃないか」という作業員もいたのですが、「ここは止める。絶対に止める」ということで徹底しました。

森川 岩崎さんは1班でしたが、ほかの班でも同じようにやってもらったということですか。

宮島 2班は1日に1回しか止めなかった。朝、涼しいときに。

工業団地によってごみの出方が違って、うちは紙み
たいなのがいっぱい来ていましたが、ゴミよけのネッ
トを張っていましたので、ストレーナーの掃除は1日
に1回ずつしていました。

神宮寺 3班も1日に1回、朝、ストレーナーの掃除
をしました。

森川 東日本大震災のときはストレーナーの掃除は
やっていないところが多かったのでしょうか。かなり
のがれきを吸って不具合が発生していました。今回そ
の反省が活かされたように思います。

川端 ストレーナーにごみが詰まると排水量がかなり
落ちます。ただし、見た目でわかる程度に落ちるまで
放置してしまうと、最悪の場合ストレーナーが破損し
て、ゴミがポンプのシャフトに絡みついたりしてポン
プ故障の原因になります。

岩崎 僕がいつも指導しているのは、一番初めにポン
プで排水を始めるじゃないですか。そのときに「ホー
スを踏んでくれ」と言うんです。「この感覚を覚えて
おいてくれ」と言う。「この感覚が柔らかくなったら
ごみが詰まっているから取れ」という指示をしていま
した。

神宮寺 隣のホースと踏み比べても分かる。

岩崎 そうです、明らかに違いがあります。夜中じゆ



写真-3 ホースを踏んで硬さを確かめる

う運転しているときも、夜中は作業員に水に入らせたくないので、ごみが詰まっていたら止めていいというふうにしてあったので、「ホースを踏んだら柔らかくなっていましたので止めました」ということもできていました。

森川 一番初期の段階でそれを実施したということが、非常に効果があったと思います。

岩崎 やはり大事に使いたかったということはありません。日本での作業の場合トラブルが発生しても替えがありますが、タイでは同じようにはいかないのです。そこは大きかったと思います。

神宮寺 タイで準備していたポンプは補給の時間に止めていたんです。しかし、国交省のポンプ車は、「1日1回休むのか」と訊かれたときに「いや、休まない。24時間連続でOKなんだ」ということで現場に行ったときに工業省に売り込んでいたのです。でも、実際物が来たら、タイのポンプも休んでいるので、日本のポンプも休ませるのだらうという感じで、タイの人も気を遣ってくれました。

岩崎 但し、休ませるときは1台ずつ休ませました。全部止まると見栄えが悪い。

塩入 後は、電流値の振れを見ながら、水の勢いとかを見て、そこら辺を注意しながら、ちょっと変化があれば「あそこのポンプを引き上げようか」みたいな感じでしたね。

川端 機械の状況を確認しながらあまり無理をさせないで、効率的に一番よいところに調整して効果的に作業していたという状況です。

神宮寺 タイの作業員もスキルがどんどん上がって行って、どこでインバーターの回転数をセットするのか分かるようになると「なぜ100%にしないんだ」という質問が出てきました。「これは10メートルのヘッド差用でつくられているポンプなんだ。ここは見てのとおり3メートルしかないでしょう？ だから100%



写真-1 ストレーナーの掃除



写真-2 ストレーナーに絡まったヘビ

にする必要はない。70%で運転していてこのポンプのスペックを満足した排水量が出ているのだから、100%にする必要はない。機械に負荷を与えないように優しく運転してやってくれ」と説明したら、それは理解してくれました。「ああ、そうか」と。でも、1日目は最初の運転なので確か全て60%にセットしていたのが、夜間巡視に行ったとき3班のポンプを見たときに出力がばらばらだったんです。だからいじったのだなと思って、またそこで直してきました。

岩崎 バンカディも、1日目は一晩様子見で1000回転（約30%）にして現場を離れたら、朝行ったら2500回転（約80%）でした。現地のエンジニアが勝手に回転数を上げたようです。

塩入 僕も1回だけありました。入ってきたときと微妙にですがちょっと変わっていたので、「あれ？ 昨日の夜いじった？」と聞いたら、「ここだけいじった。ほかは触ってない」と正直に言ってくれたのですが、やはり現地の人もちょっと触りたいとかいうのがあったみたいです。

森川 盤の表示をタイ語にしたという話も聞きましたが、書き込んだりしたんですか。

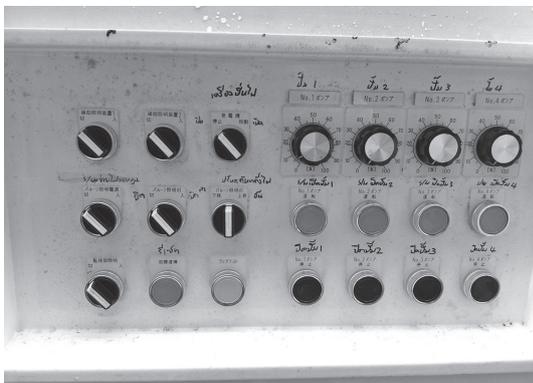
岩崎 ロジアナ1はマジックで書きました。あとはガムテープに書いてから貼っていました。

宮島 2班もマジックで書きました。

森川 タイ語を書いてあげたのは、やはり向こうの人たちがそこは分かったほうがいいだろうという判断ですか。

岩崎 そうです。夜はその人たちに任せるわけですから。

照明を入れたり切ったりというところから始まったのですが、あとは「ごみが渦を巻くときは回転を下げてね」とかそういうのもあって、「書こうぜ」ということで書きました。



写真—4 操作盤へのタイ語表記

宮島 ロジアナ2では水深を適宜確認していました。1日1回ぐらい、絶対にポンプが着地をしないように。

ロジアナ2は最初から水深が浅いというか、1メートル余りしかないところから吸っているの、どんどん下がっていきますから、ポンプ本体を移設したり、釜場を掘ったりという作業をするタイミングを図るため、1日1回ぐらいずつポートで、女性に水深を測ってもらったりしたのです。だから自分が班長をした現場で、ケーシングに穴が開いてしまったことは非常にがっかり来ています。

森川 それでポンプ車が全く使えなくなった訳ではありませんから気にしすぎることはないと思います。むしろ、水深の浅い現場でもそういった工夫で問題を克服して連続して排水した事実が重要でしょう。

神宮寺 ポンプも予備を、車1台に1基でなくてもいいですから、全体で2~3基載せていけば楽だったかもしれません。

〈燃料補給における現地の協力など〉

森川 燃料の補給のことは、東日本大震災のときには初期に燃料がなくて困りましたが、タイではそんなことはなかったのですか。いつも決まったこの時間に燃料を入れましょうという約束のもと、燃料の供給はできたのですか。

神宮寺 「自分のところでローリーを持っているから大丈夫だ」とか、現場に大きなタンクがあって、「そこに入れてあるから大丈夫だ」とか、そんな話をしていました。そこら中に置いてあるポンプがあるのですが、そのポンプもみんなその燃料を使っているんです。「それらのポンプにだって定期的に補給しているから大丈夫だよ」という話でした。

森川 本当にそのローリーが走ってきて燃料入れてくれていたんですか。

岩崎 実はロジアナ1だけローリーがなかったんです。実際には1日24時間で350リットルぐらいの燃料を消費していたので、1日に1回の給油でいいのですが、そうは言っても時間に遅れてくることもあって、これでは駄目だということで「1日2回必要だ」というのを強く言った。なおかつ、350リットルの3台分なので、1000リットル、ドラム缶5本分を常にストックさせた。絶対に切れ間がないように、ちょっと脅しを掛けながらやってもらいました。最後にはちょっとばれたのですが、「そんなに減らないじゃないか」と言われて「いやいや、それでも指示だ」ということでしっかりやってもらいました。初めはやはり信用できないこともあり、燃料切れで止まりましたというのは一番恥ずかしい話なので、そこは大きめに言いました。

森川 最後のほうは住宅地で活動しましたね。そういうところでも燃料は大丈夫だったんですか。

荒井 比較的大丈夫でした。ドラム缶で運んでいましたよ。

塩入 トラックの荷台にドラム缶を積んで、やはり1日2回巡回、受け入れ条件でそういうものを提示していたので、日々多少の時間の遅れはありましたが、それはきっちりやってもらえました。



写真一五 ドラム缶からの給油

新田 途中で供給者も建設協会から変わったんですか。

荒井 町が責任を持って燃料を出すから排水に来てくれという話でした。

森川 コミュニティーのほうもうまくいきましたね。よく向こうの協力を引き寄せたなという気がするのですが。

荒井 地元の人が工業省をつついていたらしいです。「うちの周りに水が多いのに何で吐いてくれないんだ」。どういう経緯で工業省にそういう連絡がいったのか分からないのですが、要請がありましたから行ってくださいということで、私に話が来ていました。

新田 バンコク都に隣接するノンタブリ県とかパトゥムタニ県では、浸水が長期化したため、相当不満が出ているという報道がありました。地元テレビにも工業団地での日本の排水活動が上げられたので、期待もあったのでしょうか。サイノイ地区での活動は大歓迎されたそうですね。

川端 設置しているときに周辺の方が80人ぐらい集まってきたんです。ギャラリーの多さにびっくりするとともにプレッシャーもありました。

塩入 夜なんか結構人が集まっていたみたいですよ。話に聞くと、バルーンライトが珍しいらしく、光に人が集まるのかいと。夜は夜で人が集まってくるみたいなことを言っていましたね。

川端 バルーンライトを3台とも点灯したら、かなり広い範囲で明るくなって確かに宴会できるものね。

塩入 平場で明るくなるので。夜に写真を撮りに来る人もいたとか、そんな話を聞きました。



写真一六 バルーンライト点灯下の夜間作業

新田 北陸地整局がはじめに装備したと記憶していますが、バルーンライトは、今や標準装備になったんですか。

森川 近年購入したものはほぼ付いています。

川端 北海道開発局の排水ポンプ車は付いていませんでしたが、夜間に排水状況を管理するうえでとても良いということで、全車取り付けの方で動いております。

〈排水ポンプ車について〉

森川 ポンプ車の装備のことにに関して御意見がありますか。現地で動かしてみた限りでここが弱いとか、ここは見直すべきみたいな話があったらお願いします。少し重くなっても丈夫にするべきという意見をお持ちの方もいるようですが、その辺も含めて、思うところがあればお願いします。

川端 土砂混じりの水を排水する場合アルミでできているポンプのケーシングが減りますよね。そのような条件の現場に持っていくのであれば、多少重くなっても材質等を変えるなど丈夫なほうがいいのかと思います。

塩入 確かに国内はある程度内水排除ということなので、水質が悪いところに行く前提ではないというところと、狭いところでも作業性がいいというので軽量化したポンプになっているのでしょうか、海外だったら人もたくさん手配できるのだし、軽さではなくて耐久性を重視したほうがいいとは思いますが。ただ国交省の本来の目的は海外用ではないので、そこをどうやって国交省として保有していくかというのはまたちょっと別になるのかなと思います。

新田 国交省では、内水対策に迅速対応するために軽量化設計を採用しているのですが、これは変えなくていいと思います。今後、日本の技術を海外に紹介する場合には、設計思想について説明する必要があると思います。

塩入 そうですね。その辺のスペックは状況が異なっ

てくるのかと思います。

岩崎 弱いところはケーシングの羽根と当たるところだけなんです。そこを変えるだけだと思います。結局1人で設置をすることはほとんどあり得ないのは日本国内でも同じですね。僕は30kgにこだわる必要はないのかなと思います。じゃ、何kgがいいんだというところで限りが難しいですが、当初は1人で作業ができるようにというので30kgというのを決めたとありますが、丈夫になるなら日本仕様でも31kgでも32kgでも何ら問題はないのかなと。

荒井 実際ホースを付けるとそれ以上になるのですよね。

神宮寺 そしてケーブルも重たいんですよね、ポンプは手で持ちケーブルは肩に担いで運ぶのだけど、1人では足場の悪いところは大変です。

岩崎 それで結局2人とか3人で作業することになります。

新田 ケーブルの軽量化ができると良いのですが、技術的には難しいのでしょうか。

塩入 キャブタイヤケーブルだから特注品になってしまふのですよね。その仕様でつくるので、時間もかかりますよね。

宮島 水中仕様のコネクタの開発が必要なようです。

森川 脚の部分が折れることも結構ありましたね。

岩崎 メーカーによると、軽量化による弱点がそこに来ているのではないかという話でした。丈夫にしたいなら、いっそのこと脚をなくしてしまえばいいのです。

ケーシングの形は下だけ真っすぐ平らにしたらそのままぱっと置けるんですよ。わざわざ脚を付けて出っ張っているから引っ掛かるのであって、脚をなくしたら一番いいのかなと思います。

もうちょっとひどくいくと脚だけが折れるのではなくて、ケーシングにつながっているので、ひびが入って、モーターに水が入るので危ないのです。

だからいっそのこと脚はなしでいいかなと。

新田 ポンプが軽いというのはやはり評判良かったのでしょうか。

川端 それとポンプ車の発電機がとても静かだと非常に評判が良かったです。ナワナコン工業団地でも後から追加で別のポンプを設置するため、大きな発電機を持ってきたら会話ができないくらいとてもうるさかったです。

神宮寺 工業省はすごく喜んでいましたよね。音も静かというのもあるかもしれないけれども、モバイル性がすごくいい。1台でコンパクトにどこへでも行ける。

他の物は何も要らないじゃないですか。現場に行っても工業省がいかに自分の車のように相手に「この車は高性能でとても機動性も良い」と、すごく自慢げにしゃべっていました。

荒井 現地では工業省の人が英語で説明するのに、よく「モバイルポンプ」と言っていました。持ち運びが非常にしやすい。

神宮寺 タイで使用しているポンプの場合はトラックに発電機を積んだり、ホースを積んだり、ポンプを積んだり、みんなばらばらに、しかもトラックに載せて運んでいかなければいけない。行ったら燃料の心配をしないといけいけど、日本のポンプはすべてがコンパクトに一つにまとまっていて、ポンプ車が現場に行くだけでそこで作業ができる。非常に使い勝手がいいと言っていました。

新田 最初はあの軽さは、タイのゼネコン技術者に信用してもらえなかったのです。でも、使ったら分かる人はみんな驚いたと思います。そんな軽いポンプ他にはないですものね。

神宮寺 水位変化が分かるように電柱にも毎日毎日水位を入れたじゃないですか。あれも痕跡がちゃんと追えるのでわかりやすかった。

岩崎 水位をちゃんと測れるように、1メートルぐらいの物尺は積んでおくといいですね。あれが毎回現場でどうやろうかというところで考えた。

神宮寺 スタッフ（アルミ製等の箱型ものさし）か何か入れておけばそれをすぐに使える。

新田 電柱にガムテープを貼ったのは、日本から見ても本当に分かりやすかったです。すごく効果があるなど。



写真-7 ガムテープで水位確認

岩崎 工業団地の人で毎日それを見に来ている人もいました。「今日はこれだけ下がった」というので、非常に分かりやすかった。

宮島 調査班の宣伝がよくて、浮き輪タイプのポンプ

は現地の人にとって珍しかったようです。内水の水位が下がっていてもポンプはフレキシブルに追従して、ホースも可撓性があるからちゃんと追従して、常に一定の性能が発揮できると相当説明しているものだから、日本のポンプはそういうところを評価されていた。

岩崎 浮くポンプというのはなかなかないですよ。タイでもドラム缶を使ってやっていましたが。

新田 ロジャナでやっていたドラム缶の上にちょこんと1個ポンプが載っているものと比べたら、能力からすれば日本のポンプはあれの数倍ですから、そういう意味ではすごくスマートで、コンパクトです。あんなに小さい浮き輪でつり上げられて、あれだけの高性能のポンプは度肝を抜いたと思います。



写真—8 ドラム缶をフロートにしたポンプ



写真—9 日本のポンプと浮き輪

日本の技術が国際貢献したというのを知ってもらう意味では。最近、海外との競争で日本企業が苦戦している中で、すごく評価されたことは誇らしかった。

森川 今後のポンプ車の仕様を見直すべきところにつながるような話があれば、少し挙げていただけますか。

岩崎 僕も報告させてもらったんですが、天然ダムとかそういうときでも、タイのときにも話が出たのですが、ポンプを発電機と盤とかを分離して運ぶ・運べないというのが絶対どこでも出てくる話ですよ。僕は

実際にこの仕様の車を事務所で管理したことはないですが、分離できるような仕様がどこかの事務所に配備されているとかではないんですか。

森川 あります。いくつかの地整で分解できる仕様を導入しています。

宮島 北陸では、分解可能な高揚程ポンプを中越地震直後に研究し、何年か前から調達しています。分解し、ヘリコプターで空輸ができるようになっているんです。

岩崎 そういうのもあれば空輸できたのかなとか、もっと早く。

分解できるやつを10台とかある程度そろえておいて、何かのときはそれを持っていくぞとなれば、とりあえず5台は空輸で送ってあとは船便とか、そういうことができるのかなと思って。発電機は工業団地側が用意して、制御盤とポンプだけなら、ナワナコンでもすぐに運んでいけたかなという気はします。それから、最新で入ったポンプのストレナーは結構分厚い3ミリぐらいの板なので、つぶれないんです。詰まることはあるのですが、つぶれない仕様なので、それはいろんなことから経験して対応ができてきていると聞いています。また、車載工具としては、今はちょっとした工具でいいのと、あとはホースとホースをつなぐところにゴムパッキンが入っているんですが、あれがないところが結構あったので、そういうのを入れておくと。一番初めは予備品で入っているのですが、それがなくなるとそのまま、あれは結構なくなってしまうのです。

新田 外国製のホースで、クランプのところだけ国際規格に合うようなものだけ用意しておけば、現地でサニーホースみたいなものを調達し対応できる。超軽量のパルジェットホースが不足しても大丈夫ではないでしょうか。

宮島 あと、夜間も作業をしていて、バルーンライトもつくので虫がいっぱい入ってくるんです。最後、現地で清掃してもらったんですが、私の経験だと、宮城・岩手のときにポンプ車を東北地整の山の中で6月～7月に動かしたのです。制御盤、インバーター盤の中に、ものすごい虫が、カミキリムシとか羽虫みたいなのがいっぱい入っていて、清掃がしきれないのです。メーカーは「絶縁が保証できません」との見解でした。普通の内水排除だと雨天が多いので、夜中に使っても虫があまり来ないとか、梅雨期の内水排除だと気付かないのですが、天然ダム対応とか今回みたいに晴れている日が長く、夜間も運転時間が長いと結構虫が入ってくるので、今回、掃除をして制御盤、インバーターの

機能は保証されるのかなというのはちょっと気になっています。

〈海外での支援活動のための準備について〉

森川 今後も国際支援の話が、当然あるだろうと思いますが、国際貢献の人選とかどう考えますか。皆さんはもう一回声が掛かればまた行きますか。

神宮寺 行きたいけど、行きたい人は他にも大勢いるように思います。

塩入 経験したい人は大勢いる。均等な機会を考えた方が良い。

森川 皆さんが大変な思いをしたらろうとは、多くの人も私もそう思っていますが、皆さんの中ではそれ以上に良かったという感想でしょうか。

神宮寺 仕事をしてとても喜ばれた。タイの人々のために役立ったいい仕事をしたと思います。日本にいると仕事をして喜ばれることはあまりないような気がする。

新田 ものすごく歓迎されたことは嬉しかったし、士気も高まったと思います。非常に歓待もされましたが、結果的に成果を挙げて喜ばれたことに手応えを感じたのだと思います。

神宮寺 タイと日本はよくお友達だって言うじゃないですか。日ごろから技術でも何でもいいですが、情報交換や、技術交換などを行い交流を深めておくともっと情報のやりとりも楽し役に立つと思う。

現場の工夫かどうか分かりませんが、燃料の話は事前に調べておかないと走れないということが分かりました。日本で使っている軽油はこれだよと規格を持って行ってそれを出したのです。そうしたらタイの部隊からは、「うちはシェルを使っていて大丈夫だ」という話で向こうの成分表も取ってくれました。その1社が大丈夫ならほかも大丈夫だろうと思って見ていました。

発電機は自動車エンジンほど燃料成分に過敏でないので、港から現場まで走ればとりあえず大丈夫だろうと思っていたのです。しかし、よくよく調べたら、船に載せるときに燃料は全部抜くということでした。

だから現地では満タンになって来ているのだろうか、別の燃料をタイで入れられたらどうするのだろうかとかまたちょっと不安になってしまいました。そんな不安があるので、相手国での燃料は確認しておかないとちょっと怖いかなと思いました。

森川 道路を走るということに関して言うと、今回は全部先導車で現地では走りました。向こうのナンバーか何かを取って走れば先導車がなくなってもう少し楽だったのという話もありましたが、そこは向こうで



写真—10 先導付きの移動

日本でいう車検を取っている間に水位が下がってしまうかもしれないというので、誘導してもらうことを選択しました。

荒井 それはまたケース・バイ・ケースなのでしょう。逆に先導があったから安全に走れたと言っていた人もいました。

森川 今回はいろいろ現地で必要なものを、JICAが的確に対応してくれたと感じましたが、予備品とは別に、持っていったほうがいいと感じたものは何かありますか。日本だったらすぐに調達できるようなものは向こうでもすぐに調達してもらえたのですか。

神宮寺 東日本大震災のときには、水もなくて、自分たちでいろいろなことをやっていました。今回タイではJICAの方々がホテルから何からすべてロジを組んでくれて一生懸命やってくれたので、不自由な事はなかったです。

機材とかテントをはじめ日用雑貨品までみんな向こうで段取ってくれて用意してありましたので、特に私自身はこれが必要だった、足りなかったというものはないような気がします。

〈今回の活動に加わった感想〉

森川 今回、皆さん行く前は相当不安だったのではないかと思います。しかし、帰ってきたときには、日焼けしていたこともあります。皆さんがいい顔をしていました。行く前の気持ちと帰ってきてからの気持ちの違いとか、職場に帰ったときに海外での経験を周りの人に勧められるかどうかということについて、活動を通じて感じたところがあったら最後に一言ずついたきたいと思います。

新田 私の場合は準備期間が大変に短かった。緊急援助隊はそういうものかもしれません。指示されたらすぐ行けるように常に備えていないといけないのかもしれない。私の場合の反省点は、予防接種を何も打たずに行くことになってしまった。予防接種とかそういう話については、これから国交省がもし緊急援助隊でや

るならば、あらかじめ少しノウハウをまとめておいたほうがいいのではないかと。こういうものを受けるとか、応急処置をするためのセットを持っていくとか、そういうものはあったほうがいいのではないかと感じました。

派遣するときに、絶対持っていくべきものの情報ぐらいはぱっと提供されると悩まずに済んだと思う。

地図はしばらくしてから買いに行きましたが、地図は現地で調達するしかないのかもしれないので、そこは一つ工夫が要るのかなと思います。JICAのサポートも優秀で日本とちゃんと連絡が取れる手段さえあれば、それ以外は特に不安はありませんでした。

神宮寺 当初、タイの国のこと自体をよく知らなかったもので、渡航前の予防接種のこともあって、病気のことなどがすごく不安でした。行って何をやるのかも分からなかったこともあったので、非常に不安でした。行くまでの時間が1週間もない話だったので短くて、何を用意したらいいのかも分からなくて、言われたからしょうがないんだろうと思いつつ準備して行きました。

現地に行って作業をしてみると、ロジはきちんとしているし、東日本大震災の時より設備や生活の面は充実していました。現地ではそれぞれ初めて会う人だったのですが、日本の代表で来ているんだという意識で作業をしていくというところでは、一つの目的に向かってみんなで意思疎通をしながら作業ができた。向こうに行ってから、心配は何もありませんでした。逆に、こっちに残された自分の家族が大丈夫かなという心配ができるぐらい余裕がありました。

パソコンは通信が繋がらないことがストレスで、それはネックになってハードだったかなと思っています。

宮島 私が行く前に神宮寺さんが先に行くというのは、たまたま聞きました。「北陸地整からの派遣はずっと後です」と言われて、安心していたのですが、意外と早く回ってきて、誰も行く人がいないので行くことになったのですが、実際どこで不安が解消されたかという、本省のレクチャー、事前のブリーフィングで「あなたの役はこれです」と。どこで何をやるのかが分からなければ不安ですが、活動地域と業務内容の説明が本省からあり、ほぼ不安は解消されました。

あと、本省のブリーフィングのときにも言ったのですが、権限と責任というのがあって、たまたま今回は事故が起きなかったからよかったのですが、もし事故が起きたらどうなったのかなというのは今でももやもやとしているところがあります。最悪の場合を考えて、

そこら辺の不安も解消していただけるような裏付けがあるといいなと思います。

岩崎 僕は現場の事務所の所属なので、情報が伝わってくるのに結構時間がかかるんです。課長に行って、事務所長に行って、支所長に行って、僕のところに来る。言われたときには二つ返事で、「すぐ行きます」という話でした。僕は班員だろうと思っていたのです。東京へ行って説明を受けると班長だということで、「これは僕にできるのかな」と。ほかの皆さんがみんな課長補佐ばかりなので、そんなことを僕がやっていいのかなと実際不安でしたが、現場に行けばもうやるしかないので頑張らせてもらいました。

やはり事前の情報は僕たちには入ってきたのですが、よくありがたかったです。僕たちの後に来る人のために僕ができることがないかといったときには、レポートを毎日書いて、日本に送っていました。情報共有は大事だと思うので、そういうのは今後、誰が行ってもできる体制と、情報を共有できるシステムづくりは非常に大事かと思いました。

それから、体制づくりということで、帰った後でJICAのホームページを見ていたら、「国際緊急援助隊」というのは、例えば医療チームなどは、自発的な意志に基づいて、事前にJICAに登録されているらしいです。もし今後もこういうことがあるならば、国交省でもTEC-FORCE隊員は登録されていますよね。あらかじめTEC-FORCE隊員の中の研修の一環でもいいですが、海外に行ったときにはこういう状況があるという説明が入っているとだいぶ違うと思います。

川端 派遣が決まってからの準備期間が意外と短く、業務の引き継ぎ、予防接種、激励会、本省打合せ、荷造り等であつという間に時間が過ぎたおかげで不安に思う時がありませんでした。不安に思ったのは、タイ行きの飛行機に無事搭乗して落ち着いたときに自分のできるかなと若干の不安はありました。ただ活動が進められている状態でもあるので現地までたどり着けば何とかなるだろうと考えるようにしました。また、前任者の岩崎さんから現地での引き継ぎも2日間と十分な期間があったので作業をスムーズに行えました。また、班体制で海外経験があるゼネコン、ポンプメーカーの方がいて、それぞれのアドバイスが大変助かりました。国際緊急援助隊という初めての経験で、現地の洪水状況を目の当たりにして気持ちがかかなり高ぶっていましたが、安全や機械を故障させないための冷静な判断ができ、事故がなく、また機械を壊すこともなく活動できたと思います。

タイの方々と協力して、ポンプの設置を行い、排水



写真—11 サイノイ村の人々

作業を始めて路面が出てきたときの達成感と、タイの方々がとても歓迎してくれたことがとても嬉しくモチベーションが上がりました。また、日本では当たり前と思っていたポンプ車に関する技術が海外でも通用し、又必要とされる技術であるとわかり、自分の仕事に誇りと自信が湧いて来たことがよかったです。

荒井 僕はほぼ後半戦、最後までいさせていただきました。不安な点については、私は東南アジアが初めてで、もちろんタイも初めてですが、そこで仕事をする。日本の機械を持って行ってそれで排水作業をするというので、前に行った下館の小貝川で排水するのは訳が違うのではないかと、それがうまくいくのかという不安がありました。生活も食事も違うし、健康面での不安は、行く前はありました。

実際現場に入ってしまうと、後半戦だったので皆さんのやっている仕事を引き継いだので、特に不安もなく、泊まっているホテルも食事も問題なく、結果的には快適に仕事ができる。ただ、調査チームの仕事としては、後半戦には若干ポンプが動いていない時間があって、もう少しサイトハンティングを効率的にすればよかったとは、今振り返ってみると思います。やっているときは一生懸命だったので気が付かなかったですが、それが最後、ちょっと心残りではあります。

あとは地元の人、特にサイノイとかプライバーンなど小さな町や村で排水して、地元の人に非常に明るい笑顔で感謝されたので、非常にやりがいがあったなということで帰ってきました。

塩入 最初は当然知らない国に行って仕事をするということで不安はあったのですが、直属の上司の神宮寺さんが先に行っているもので、行けと言われれば断ることもできず、あとは神宮寺さんが帰ってきてから1週間ぐらい話を聞ける機会もあって、そのときに「現場は全然心配ないよ」という話もいただいていたので、そういう面では何とかなるかなという思いもありまし

た。

最初に話をもらったときは不安はあったのですが、いろいろと情報提供をしてもらったので、だんだん不安という部分は薄れていきました。すぐ近くに同じことで行った人がいたということは、精神的にはだいぶ楽になった面はありました。

行ってからも、最後のほうだったので、前任の川端さんからもいろいろレクチャーを受けたり、班員のゼネコン、ポンプメーカーを含めて流れがもうできていますので、比較的苦勞することもなく、すんなり中に入って一緒に作業できました。最初に行った人たちは非常に苦勞があったと思いますが、そういう面では最後のほうで、軌道に乗った状態だったので、前のほうに行った人たちよりは環境的には整っていてよかったところがありました。

荒井さんからもあったとおり、地元の村の中で排水していたので、非常に喜ばれて、これは本当によかったな、こういった作業に携われてよかったと率直に思いました。関東地整でも「いいな、行きたいな」と言っていた人はいましたので、行きたい人は結構いるのではないのでしょうか。感想を含めて以上です。

森川 ありがとうございます。最初に話があったように、喜んでいる顔が見られて、久しぶりに喜ばれる仕事をしたという話が結構大きかったのかなという気はします。最初は心配をしていましたが、皆さん元気に、けがもなく帰ってきたのが一番よかったと思っています。ポンプ車も、派遣したときは10台持っていたうち1台廃車のようなになったらどうしようとか考えてもいましたが、そういうこともなさそうなので安心しました。



写真—12 座談会参加者

本日は、長い時間に亘って、いろいろとお話を聞かせていただきありがとうございました。